

令和 5 年 6 月 13 日現在

機関番号：33908

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2019～2022

課題番号：19K01089

研究課題名（和文）バルカン戦争時におけるボスニアへの難民の流入とハプスブルク帝国の対応

研究課題名（英文）The Balkan Wars and the Refugees into Bosnia under the Habsburg Empire

研究代表者

米岡 大輔（YONEOKA, DAISUKE）

中京大学・国際学部・准教授

研究者番号：90736901

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,000,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、20世紀のヨーロッパにおける難民問題の歴史を掘り下げるにあたり、バルカン戦争時（1912年-1913年）に生じたムスリム難民の諸動向に注目した。とくに、1908年10月にハプスブルク帝国によって併合され、帝国領のうち戦争の最前線となったボスニア・ヘルツェゴビナ（以下、ボスニア）に流入してきた、トルコ系とアルバニア系のオスマン帝国臣民に焦点を当てて、難民の流入をめぐるハプスブルク帝国の対応や、難民に対するボスニア諸民族の反応、を明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究の学術的意義は、国民国家体制を中心とする歴史観が批判的に見直されつつある現状を踏まえて、ヨーロッパ近代史の中で埋没してきた難民の動きに着目し、ハプスブルク帝国の諸政策とボスニアの多様な住民集団との関係においてそれを捉え直した点にある。そしてその研究成果として、21世紀のヨーロッパを取り巻く国際情勢を視野に入れつつ、口頭報告や論文の執筆を通じて、難民問題も含めたバルカン半島の歴史的諸相を広く知らしめようとした点が社会的意義と考えられる。

研究成果の概要（英文）：In delving into the history of refugee problems in Europe in the 20th century, this study focuses on Muslim refugee movements that occurred during the Balkan Wars. In particular, I focus on the influx of Ottoman subjects of Turkish and Albanian descent into Bosnia and Herzegovina, which was annexed by the Habsburg Empire in October 1908 and became the frontline of the war among the empire's territories. The study revealed the Habsburg Empire's response to the influx of refugees, and the reactions of the Bosnian peoples to the refugees. Previous studies have focused on placing the refugee issue in European history within the context of the development of the nation-state system after World War I, and have not attempted to discover and empirically examine the above facts. In contrast, this study presents a new image of 20th century European history concerning refugees by redefining it in relation to the various policies of the Habsburg Empire and various resident groups in Bosnia.

研究分野：東欧近現代史

キーワード：バルカン戦争 ハプスブルク帝国 ボスニア 難民

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

20 世紀のヨーロッパで生じた難民を対象とする先行研究は、第一次世界大戦終結時の諸帝国の崩壊から第二次世界大戦後へと、国民国家体制の発展の中で難民の動きを考察することに重きをおいてきた。そのため、バルカン戦争中のムスリム難民の問題もその文脈に位置づけてきており、そこに収まらない難民の存在や周辺地域へのその影響は看過する傾向にあった。例えばバルカン史研究では、強制移動などのバルカン諸国の民族政策、あるいは、小アジアへの難民の移動とその後のオスマン帝国及びトルコ共和国の対応を検証するものが主流であり、戦争中の難民をめぐるそれ以外の状況に着目した研究は十分ではない。他方ハプスブルク帝国史研究では、バルカン戦争期における帝国の外交政策あるいは内政状況を実証的に考察する研究が現れてきている一方、戦争に伴い生じたさまざまな住民移動が、ハプスブルク帝国の外交政策や、ボスニアも含む帝国の内政状況にどのような影響を及ぼしたのかについてはほとんど検討されてこなかった。

そこで、以上の先行研究の現状を踏まえて、バルカン戦争時にボスニアへ流入したムスリム難民をめぐるハプスブルク帝国の対応とボスニア諸民族の反応の考察を研究課題として設定する必要があると考えた。まず、平成 26 年度から翌年度にかけて、「バルカン戦争期におけるボスニアのイスラーム教徒帰還問題とハプスブルク帝国の対応」という題目の科学研究費補助金(研究スタート支援)を受け、オスマン帝国領内に移住していたボスニアのムスリムがバルカン戦争を契機に自らの出身地へと帰還していく様相と、その際のハプスブルク帝国による内外の諸政策を実証的に解明した。そのうえで、次に取り組むべき課題としたのが、非ボスニア系のムスリム難民の諸動向とそれをめぐるハプスブルク帝国の対応をより多面的な視角から考察するために、ボスニアへと流入したトルコ系やアルバニア系のムスリム難民の状況とそれに対する帝国の諸政策の解明であった。

2. 研究の目的

1912 年からバルカン同盟諸国とオスマン帝国との間で展開されたバルカン戦争では、同盟諸国が各戦線で勝利し支配領域を広げていくと、国民国家体制の基盤整備にむけて自民族の急速な均質化を進めたため、同地に暮らすムスリムが虐殺されたり移動を強いられたりするなどして排除の対象とされた。オスマン帝国からバルカン諸国が得た全領域では、ムスリム人口が約 145 万人も失われたとされる。

こうして戦争の勃発に伴い急増したムスリム難民のうち、トルコ系やアルバニア系のオスマン帝国臣民の中には、1908 年 10 月にハプスブルク帝国が併合したボスニアに流入した者もいた。当時のボスニアは、独自の憲法の発布や議会の設置を通じてハプスブルク帝国領土としての統合が進む一方、正教徒のセルビア人、ムスリム、カトリックのクロアチア人が混住する地域であった。そのためトルコ系やアルバニア系のムスリム難民にとっては、バルカン諸国の姿勢が厳しさを増すにつれ、ボスニアがさまざまな民族・宗教の呼びとが暮らす地として避難先の一つとされた。

以上の歴史的背景を踏まえて本研究の目的は、ハプスブルク帝国が、帝国領土のうち戦争の最前線となったボスニアへと流入するトルコ系・アルバニア系のムスリム難民の動きにいかに対応したのかを考察することであった。その際まず、この難民問題がハプスブルク帝国にとって人道的課題としてよりも、ボスニアが長らくオスマン帝国領だったという前提のもと政治的課題として位置づけられた点に注目した。1878 年 7 月に結ばれたベルリン条約でオスマン帝国はハプスブルク帝国にボスニアの占領を認めさせたものの、その主権は譲らず 1908 年まで自国の領土と

して主張し続けた。そのためハプスブルク帝国としては併合後も、オスマン帝国国籍をもつ難民がボスニアに定着し永住することは避けねばならなかったのである。そこで、ハプスブルク帝国がそうした事態の回避にむけてそれらの難民にいかなる対応をとったのかを、本研究の最初の課題とした。続けて、セルビア人、ムスリム、クロアチア人からなるボスニアの住民がこの難民の流入にどのような反応を示したのかも考察することにした。1910年に議会が成立し各民族の政治活動が活発化するボスニアでは、彼らの動きが難民をめぐるハプスブルク帝国の諸政策にも作用したと推測されたし、また、戦時における帝国のボスニア領有の安定化という重要な課題にも深く関わっていると考えられたからである。

3. 研究の方法

本研究は、日本の各種図書館・研究所にほとんど所蔵がないバルカン戦争関連の文献（英語、ドイツ、フランス語、セルビア語、クロアチア語）を広く収集し精読しながら、戦時の歴史的背景を探ることからスタートした。そのうえで、バルカン戦争時にボスニアへと流入してきたアルバニア系・トルコ系のムスリム難民をめぐるハプスブルク帝国がどのように対応したのかを明らかにすべく、(1)ボスニア統治当局による難民の受け入れ、(2)難民に対するボスニア諸民族の反応、という2つの論点に重きをおき考察を進めることにした。

当初の計画ではまず、(1)の課題の実施にあたり、州政府などボスニア統治機関の行政文書を収蔵しているボスニア国立文書館と、在外公館の報告書などハプスブルク帝国の外交文書を収蔵しているオーストリア国立文書館を訪問し、未刊行史料の収集・分析を進める予定であった。さらに(2)の課題の実施にあたっては、ボスニア議会の議事録や各民族の政党の機関紙が閲覧可能であるボスニア国立図書館で、同時代の刊行史料を収集・分析するつもりであった。

しかし2020年春からのコロナ感染症の拡大、さらに2022年の国際情勢の変動に伴う渡航費の高騰からヨーロッパへの渡航自体が困難となったため、上記の施設に直接訪問して史料を閲覧することは断念せざるをえなかった。そこで、これまでの研究活動で収集してきたボスニアとオーストリアの両国立文書館の未刊行史料から本研究課題に関連する諸事実を再び掘り起こし分析する作業を進めると同時に、海外の研究者の協力やオンラインを通じて入手可能な刊行史料を収集・分析する形で本研究を遂行した。

4. 研究成果

(1) ボスニア統治当局による難民の受け入れ

流入後の難民の処遇：ハプスブルク帝国のボスニア現地の統治機関である州政府は、バルカン戦争中にトルコ系やアルバニア系のオスマン帝国臣民の受け入れを進めたが、その際、両者への対応には差異が見られた。前者のトルコ系の難民の受け入れに関しては、州政府は慎重かつ消極的な反応を示したのであった。例えば州政府は1912年10月中旬に、ヘルツェゴヴィナ地方南部のフォチャ郡から、モンテネグロの攻撃に伴い600名のムスリムが家畜と一緒に越境を求めているという報告を受けると、可能な限りそれを止めるよう指示したのであった。さらに、万が一彼らが実際に越境してきた場合でも、戦争中はボスニア領内にとどまることができるが、終戦後にはすぐに帰還させることになるだろうとの見解を示した。そのうえで、オスマン帝国領からヘルツェゴヴィナ地方への越境に関しては、おおよそ次の規則を定めるに至った。家畜を伴う越境は、獣医学的な観点から決して認められない、ボスニア内への滞在期間は戦争終結までに限られ、その後は必ず戻らねばならない、越境する場合、難民は宗派や家族構成に加えて所持品の量も申告せねばならない、武器・弾薬類は必ず取り上げられる、越境時には診療を受ける必要があり、もし感染症への罹患者がいる場合、隔離されることになる。

他方、後者のアルバニア系の難民の受け入れに関しては、州政府は個別の対応をとることとなった。というのも彼らの存在は、ハプスブルク帝国が、領土拡張を目指すセルビア王国への対抗措置として外交上アルバニアの独立をおし進める中で政治的に利用しうるものだったからである。例えば州政府は1913年1月に、ボスニアに流入してきたアルバニア人難民と接触し、彼らがバルカン諸国とオスマン帝国の戦争の中どのような行動を示してきたのかについて聞き取りを行った。そのうえで、彼らの中に戦時の混乱を踏まえてハプスブルク帝国の支援のもとアルバニアに独立した政府がもたらされるべきだとの機運があることを確認したのであった。さらに、サラエヴォに滞在中のアルバニア系難民の一部が反オーストリアのイギリス領事館書記官との接触をはかった際には、ボスニアで保護されている彼らの現状に鑑みて、そうした行動は慎むよう提言していたことも明らかとなった。

難民の帰還をめぐる

ハプスブルク帝国はバルカン戦争の進展に伴い、ボスニアに流入していたトルコ系とアルバニア系それぞれの難民をオスマン帝国とアルバニアへ帰還させようとしていった。トルコ系の難民に関しては、戦勝国となったセルビアなどのバルカン諸国の政治的動向も念頭におきつつ、オスマン帝国がバルカン半島からのムスリム難民の受け入れを進めるのに応じて、アナトリア方面への帰還を進めたのであった。他方アルバニア系の難民に関しては、アルバニア内外の不安定な政情に鑑みて、彼らをボスニアから同地に円滑に帰還させるのは容易なことではなかった。しかしボスニアでの彼らの滞在が長期化するにつれて、その保護に要した費用などが問題化した。とくにそうした事態は、ボスニアのムスリムやセルビア人の間に摩擦を生みうるものとして見なされたため早急な対応に迫られる中、最終的にその支援を停止するに至り、アルバニア系の難民に対してはハプスブルク帝国内で生活の糧をみつけれられるかどうか、あるいは別の場所に移動するかを求めていくこととなったのであった。

(2) 難民に対するボスニア諸民族の反応

本研究では、ハプスブルク帝国が以上の難民への対応をとる過程で、セルビア人、ムスリム、クロアチア人のボスニア諸民族の動向にどのように向き合ったのかという問題を扱うにあたり、戦争中のボスニア各民族政党の動きも考察対象とした。

そこでまず、戦争中のボスニア議会の議事録を入手し、各民族を代表する議員のやりとりの分析を進めた。というのも、1910年にボスニアで創設された議会は、各政党が民族的利害を代表し、州政府に意見を提示する場として機能しており、それゆえバルカン戦争がボスニアで惹起した事態の様々な変化は、各政党の言動に大きな影響を及ぼしたであろうと推察されたからである。しかし残念ながら、ボスニア議会において各政党の議員がムスリム難民問題を重要な議題として取り上げた事実は確認されなかった。

次に各民族の政党の機関紙を集めその言説を分析することにしたが、本研究を進める過程で、先行研究がすでにセルビア人政党やクロアチア人政党の機関紙を取り上げていたのを把握できたため、ムスリムの政党ムスリム統一組織の機関紙である Zeman (「時代」という意味。1911年9月から1912年10月まで刊行)と後継紙 Novi Vakati (「新たな時代」という意味。1913年7月から12月まで刊行)の精読を進めることにした。その結果、各紙では、戦況の推移に関する報告が逐一伝えられるとともに、バルカン同盟諸国と戦うオスマン帝国への連帯を示すメッセージや戦争に巻き込まれたムスリムへの財政的支援の呼びかけなどが掲載されていたことが確認できた。こうした彼らの言論活動がムスリム難民問題へのハプスブルク帝国の対応にどれほど直接的な影響を与えたのかについては、今後も検討の余地がある。だが、戦時下においてセル

ビア人やクロアチア人内でナショナリズムの高揚あるいは南スラヴ主義の拡大が見られる状況の中、ハプスブルク帝国がボスニア領有の安定化をはかるにあたり、ムスリムとの政治的関係を重視しながら、難民問題に向き合わざるをえなかったことは間違いないと考えられる。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計0件

〔学会発表〕 計0件

〔図書〕 計4件

1. 著者名 米岡大輔	4. 発行年 2020年
2. 出版社 昭和堂	5. 総ページ数 22
3. 書名 「聖戦からユーゴスラヴィアへ-大戦とボスニア・ヘルツェゴヴィナのムスリム-」大津留厚編 『民族自決という幻影』	

1. 著者名 米岡大輔	4. 発行年 2021年
2. 出版社 丸善出版	5. 総ページ数 4
3. 書名 「ボスニア・ヘルツェゴヴィナのムスリム」「ボスニアの博物館と記念碑」中欧・東欧文化事典編集委員会編 『中欧・東欧文化事典』	

1. 著者名 米岡大輔	4. 発行年 2023年
2. 出版社 丸善出版	5. 総ページ数 1
3. 書名 「ボスニア・ムスリムのその後」川成洋編 『ハプスブルク事典』	

1. 著者名 米岡大輔	4. 発行年 2023年
2. 出版社 岩波書店	5. 総ページ数 14
3. 書名 「バルカンにおけるイスラム受容」林佳世子編 『岩波講座 世界歴史 第13巻』	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------